

# 接続から見た広島方言話者の 「じゃ」の使用について

——自然談話と映画の談話の比較分析——

上 野 順 子

## 1. 研究 目 的

広島で開催された講演会で、主催した広島方言話者は「今日は広島方言で話を進めようと思いましたが、ガラが悪くなるのでやめておきます」と冗談を話していた。また、筆者自身のゼミで「広島方言話者として広島方言をどう思うか」というアンケートが行われたが、全員が「きたない」もしくは「こわい」と述べた。佐藤・米田編（1999）の調査と同様に、「きつい」「荒っぽい」などが広島方言のステレオタイプのイメージと言える。しかし、広島方言話者は常にそのイメージを感じて会話しているだろうか。意識された方言と、自然に話された方言では特徴が違うのではないか。佐藤・米田編（1999）の調査では、広島方言のイメージの要因となる言葉に「じゃ」が最も多く挙げられており、この「じゃ」の使用が、広島方言を特徴づけると予測される。

本研究目的は、広島方言の「じゃ」に焦点をあて、談話の中でどのように使用されているのか実態を探るものとする。特に、分析対象の談話に、実際の自然会話を録音した自然談話と、映画の談話の二種類を扱うことで、実際の方言と作られた方言の違いを示すことを目的とする。自然談話と広島を舞台とした映画の談話を比較することで、前述のステレオタイプのイメージが形成された要因を探る手がかりとなると考える。

なお、方言を談話分析の手法によってアプローチする重要性についても主張したいと考える。従来の研究では、アンケートやインタビューなど内省調査による手法がとられる傾向にある。実際の会話の録音データを分析対象とすることで、従来の研究によって明らかにされてきたイメージや方言と共通語の混在などの実態が提示できると考える。

## 2. 先行研究

### 2-1. 広島方言の「じゃ」とステレオタイプのイメージ

本稿で広島方言の断定助辞「じゃ」の接続のみを対象とする理由は、広島方言での「きつい」などのイメージの要因となる言葉に、「じゃ」が最も多く挙げられることにある。佐藤・米田編（1999）は、県外出身者のあげた「きつい・荒っぽい」というイメージを持たせる具体的な言葉が4つに集中したと述べている。4つの言葉とは、(1)断定辞の「じゃ」、(2)「じゃけー」、(3)人称詞「ワシ」、(4)文末詞「ノー」である。(1)も(2)も「じゃ」が関わっており、断定辞の「じゃ」がステレオタイプとされる「きつい」などのイメージに関連が深いと推測する。

また、ステレオタイプなどイメージに関しては、ある言葉から人物像が想像できる場合がある。このような言葉を金水（2003）は「役割語」と呼んでいる。金水編（2007：2）は役割語をステレオタイプの言語的側面と述べており、役割語は使用する人物のイメージ形成を担う言葉と言える。広島方言に関する役割語については、まず「老人語」が挙げられる。老人語の下位語とする博士語の言語的特徴を、金水（2003：5）は主に次の4点としている。以下の一覧は、金水（2003：5）の表を元に、博士語及び標準語に該当する部分のみを抜き出して修正したものである。

	< 博士語 >	< 標準語 >
断定	じゃ	だ
打ち消し	～ん、～ぬ	～ない
人間の存在	おる	いる
進行、状態等	～ておる／～とる	～ている／てる

この特徴を見ると、打消しの「ぬ」以外、広島方言の特徴とされている形式である。しかし、この言語的特徴を広島方言話者が使ったとしても、「老人だ」と思われることは少ないだろう。つまり、この言語的特徴のみでは広島方言と老人語の区別は難しい。自然談話と映画の談話において、上記の形式が、前後にどのような形式と接続することによって使用されているのかについても検討することで、実際の談話における方言とステレオタイプの方言の違いが出てくるものと予測できる。

熊谷（2003）はドラマと日常会話の相違点について、シナリオが発話より

先行して存在することを挙げており、更に視聴者という不特定多数のための会話であると述べている。日常会話では会話の相手とコミュニケーションが取れば不都合はないが、ドラマでは視聴者に届くことが目標であると言う。また、熊谷（2003）はこの不特定多数のための会話について、ジレンマを生むことがありその典型例は方言使用であると指摘している。視聴者のための会話であるため、誰にでも判る意味の方言を使用するが故に、実際の方言ではなく擬似的方言になると言う。また、杉村（2003）は、ドラマでの役の出身地を明示するために方言が使われ、誇張があると述べている。この誇張には、擬似的方言が人物のイメージ形成に寄与していることを表していることが窺える。本研究では、ドラマではなく映画を研究対象としているが、シナリオが存在し目的を持って作られた会話という点ではドラマと映画は共通し、同様に擬似的方言の存在も映画に出現すると予測する。

## 2-2. 「じゃ」と「だ」の関係

徳川（1989：1117）には、「[じゃ][助動]（であるの転）①指定、断定の意を示す。だ。」とある。広島方言の「じゃ」は共通語の断定助辞「だ」に対応することが判る。しかし、実際には広島方言話者は断定助辞「じゃ」の使用の他に、同じく断定助辞「だ」も使用する場合がある。灰谷（2005：103-104）は、広島方言における関西方言「や」の受容を論じている中で、断定辞「や」「だ」「じゃ」の選択について、対面による意識調査を行い、以下のように示している。

表1：断定助辞の表れ方

	や	だ	じゃ
1 雨だ	8	15	121
3 雨だろう	6	23	158
8 雨だから	5	16	151
(9 雨じゃないから)	20		137
2 雨だった	8	94	68
4 雨だったら	8	89	73
5 雨だって	7	62	27
6 雨だって	5	115	37
7 雨だったって	3	105	47

灰谷（2005：104）

灰谷 (2005 : 104) により、広島方言話者の中には「じゃ」を使用する者や、「だ」を使用する者も存在していることが確認できる。本研究では、灰谷 (2005) で指摘された広島方言話者の「じゃ」と「だ」の2つの使用があるという点に注目し、「じゃ」と「だ」の混在について談話データから探るものとする。

### 3. 調査概要

#### 3-1. データ

分析対象とする談話データは3種類で、自然談話が2つ、映画の談話が1つである。表2は自然談話データ、表3は映画の談話データの概要をまとめたものである。

表2：自然談話データの概要

自然談話	会話者	会話者の関係	録音時間	収録日	会話者の出身・居住地
データ1	M1 : 50代男性 F : 20代女性	学校職員と学生 初対面	22分41秒	2009.07.07	いずれも広島
データ2	M2 : 30代男性 F : 20代女性	店員と客 6年の付き合い	45分41秒	2009.09.29	いずれも広島

表3：映画の談話データの概要

映画の談話	会話者	会話者の関係	対象時間	談話の舞台
データ3	30代～60代の男性 約30人	面識がある者同士。上下関係も 存在し、敵対する者も居る	45分	広島

データ1は、M1が学校職員(50代男性)、Fが学生(20代女性・筆者)の自由会話である。M1とFは見かけたことはあるが面識がなく初対面と言える。ただ、FはM1に大学において間接的に世話になっており、面識がないといえども積極的な会話がされていた。M1の広島方言について、M1は自身では自分に広島方言は出ない、皆無だと言い切っている。しかし周囲からは広島方言丸出しと言われている。従って、M1は広島方言を自身ではあまり話していないとしており、意識して方言を出そうとしていない。会話が終了した後も「広島方言出とったかね」と話していた。

データ2は、M2が店員(30代男性)、Fが客(20代女性・筆者)の自由会話である。店内での会話であるが、商売の話は一切していない。話題は、家族や友人の話が主となっている。FはM2の店に6年ほど通っており、気遣いなく話せる間柄と言える。広島方言については、M2は仕事上意識して

広島方言を話すまいとしていると述べていた。しかし、Fとは仕事当初からの付き合いもあり、方言に対して意識せず、自然に会話を行っている、会話中に話される一文があった。

次に、映画の談話については、広島方言のイメージとして挙げられやすい「こわい」「きつい」などを印象を持つであろう、広島方言を話すやくざを対象とした。映画の談話は広島方言を話すやくざが登場する映画、深作欣二監督（1974）『仁義なき戦い 完結篇』99分のうち0分から45分までを調査対象とした。やくざが登場する映画を対象とした理由は2つある。1つはやくざそのものが「こわい」などのイメージを持ちやすい為である。もう1つは広島が舞台である為、このデータからは広島方言が顕著に現れると推測できたためである。

なお、本研究で扱ったデータは、自然談話においては調査対象とした協力者が2人と、映画の談話に比べ人数が少ない。また、会話相手も女性と限定されている。その為、自然談話と映画の談話のデータ量に差がある。また、映画も全時間を分析対象としてはいない。限られたデータではあるが、実態を提示することが本研究の意義であり、数量的に充実、均質化することは今後の課題とする。

### 3-2. 調査方法

自然談話の収録には、ICレコーダーによって録音し、会話は全て文字化を行った。収録にあたっては、協力者には「じゃ」については言及せず、広島方言の研究とだけ伝えている。また、収録前に出身地と居住条件の確認も行った。

なお、データの比較では、映画の会話者が男性であることから、自然談話においても男性（M1、M2）のみを対象とする。

## 4. 分 析

分析では、自然談話と映画の2つの談話における「じゃ」と「だ」を抽出し、確認できた計12種類の接続の形式によって分類を行った。表4は、「じゃ」と「だ」を、接続の形式（①～⑫）別に集計した結果である。表の左から「じゃ」接続の一覧、自然談話の「じゃ」と「だ」の使用数、映画の談話の「じゃ」と「だ」の使用数を表している。括弧内は使用数の百分率を表し、「じゃ」及び「だ」の総数を分母とし、接続の形式別の割合を示

す。小数点は第1位を繰り上げて表示している。なお、自然談話の使用数は、自然談話データ1のM1とデータ2のM2を合計したものである。

表4から、以下の3点の特徴が挙げられる。

特徴(1)：自然談話では「じゃ」と「だ」が混在しており、映画の談話では「じゃ」のみの使用となる。

特徴(2)：「じゃ」と「だ」の混在の割合は、接続によって差がある。

特徴(3)：自然談話と映画では終助詞の使用が異なる。

表4：接続別「じゃ」使用数と「だ」使用数の比較

「じゃ」接続	自然談話				映画の談話			
	じゃ使用数(%)		だ使用数(%)		じゃ使用数(%)		だ使用数(%)	
①じゃけ (だから)	19	(32%)	7	(23%)	13	(12%)	0	(0%)
②じゃけど (だけれど)	13	(22%)	8	(27%)	0	(0%)	0	(0%)
③じゃろ (だろ)	8	(14%)	1	(3%)	9	(8%)	0	(0%)
④じゃね (だね)	7	(12%)	2	(7%)	0	(0%)	0	(0%)
⑤じゃが (だが)	6	(10%)	0	(0%)	7	(6%)	0	(0%)
⑥じゃった (過去形)	2	(3%)	9	(30%)	4	(4%)	0	(0%)
⑦じゃ (後続なし)	1	(2%)	1	(3%)	55	(50%)	0	(0%)
⑧じゃあ (だと)	1	(2%)	0	(0%)	11	(10%)	0	(0%)
⑨じゃな (だな)	1	(2%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
⑩じゃの (だな・ね)	0	(0%)	0	(0%)	8	(7%)	0	(0%)
⑪じゃと (だと)	0	(0%)	0	(0%)	2	(2%)	0	(0%)
⑫じゃって (だって)	0	(0%)	2	(7%)	0	(0%)	0	(0%)
合計	59	(100%)	30	(100%)	109	(100%)	0	(0%)

まず、特徴(1)「じゃ」と「だ」の混在について述べる。自然談話においては「じゃ」総使用数は59例で、一方「だ」総使用数は30例となり、およそ2:1の割合で「じゃ」と「だ」双方が談話に現れている。同じ意味とされた「じゃ」と「だ」が完全に一致しておらず、混在の関係にあると言える。一方、映画の談話においては「じゃ」使用数が109例中109例と「じゃ」のみが現れており、共通語「だ」が現れないことが判る。つまり、映画の談話では広島方言のみが使用されることが特徴といえる。

次に、特徴(2)「じゃ」と「だ」の混在と接続の関係について述べる。「じゃ」と「だ」は12種類の接続の形式に同等に出現するのではなく、接続によって割合が異なり、さらに自然談話と映画の談話でも違いが指摘できる。

まず、自然談話では、「①じゃけ」が19例(32%)、「②じゃけど」が13例(22%)と使用数が多い。一方、映画では、接続のない「①じゃ(後続なし)」が55例(50%)と半数を占める。また、自然談話では、「⑥じゃった(過去形)」のみ、広島方言が2例(3%)、共通語が9例(30%)と共通語を使う割合が高い。灰谷(2005:103)が、「ダ+促音+タ行音」の形態を持つものに「ダ」が現れる傾向が強いと指摘している点につながる。

最後に、特徴(3)「じゃ」と「だ」と終助詞(④⑨⑩)との関係について述べる。「じゃ」に接続された終助詞に注目すると、同意や確認、及び詠嘆の意味を持つ「ね・な・の」の使用が、自然談話と映画とは異なっている。自然談話では「④じゃね/⑨じゃな」の使用があるのに対し、映画の談話では「④じゃね/⑨じゃな」の使用は見られず、「⑩じゃの」の使用が確認できるだけである。終助詞の使用の違いによって、与える印象にも影響があると予測される。

#### 4-1. 特徴(1)「じゃ」と「だ」の混在

##### 4-1-1. 映画の談話における「じゃ(後続なし)」

表4より、映画の談話の「じゃ」使用数を接続別に見ると、109例中55例(50%)が「じゃ(後続なし)」であり、「じゃ」の使用数の半分を占めている。「じゃ(後続なし)」は終助詞の併用がなく、断定の表現となり、発話者の意志を明確に表していると考えられる。この断定の形式により映画中の人物の「きつい」「こわい」などの性格を描写することとなり、ステレオタイプのイメージにつながっているものと考えられる。逆に、自然談話では、「じゃ(後続なし)」は1例しか見られず、断定表現が使用されておらず、「きつい」「こわい」などの印象を与えない会話がされていた。

一方、2-2で挙げた灰谷(2005:103-104)の断定辞「や」「だ」「じゃ」の選択使用では、言い切り形である「雨や」8人、「雨だ」15人、「雨じゃ」が121人と、「じゃ(後続なし)」が多く見られている。この結果について、以前ゼミで同様の議論をしたことがある。「雨じゃ」など気付きを表す場合は、「じゃ(後続なし)」を使うことはゼミで一致したが、今回映画の談話で見られたような自身の意見を主張する「じゃ(後続なし)」には、使用しないという意見であった。今後、さらにデータを集めて検討する必要があると考える。

例1～例4は、映画に見られた様々な場面での「じゃ(後続なし)」を取

り上げたものである。会議のような意見を主張する場面での使用の他、人物紹介や雑談などでも「じゃ（後続なし）」が使用されている。談話で見られた12形式の接続の中で、「じゃ（後続なし）」という1つの形式が半数を占めたことは映画の談話の話し方の特徴と言える。

#### 例1：人物紹介の場面

- 8 天政会男3 だれなあ  
9 天政会男4 ヒロノんとこの若いもんじゃ

#### 例2：会議の場面

- 206 右腕 それに松村はのう↑わしらとちごうて（ ）青年じゃけん  
207 右腕 天政会の将来担うにはうってつけじゃ  
208 右腕 年の割には、人間が（ ）できとるけんのう

#### 例3：引き止める場面

- 296 保 やめられたら困る  
297 保 これからはあ何としてもあんたの力が必要なんじゃ

#### 例4：雑談の場面

- 342 市岡 なんかあるんの  
343 ヒロノ ああ↑  
344 ヒロノ ちいと昔を思い出したんじゃあ  
345 ヒロノ なんよ、わしみとうな目にあいよる、若いもんが出てきよるかと思うと  
346 ヒロノ 気が減入るわい  
347 市岡 はあはっはっ何をいおるんない  
348 市岡 うちにゃびんびんしとるのがえつと揃っちょるけえたまには不自由せんわいな  
349 ヒロノ 誰も知らんのじゃあ、ケンカの後始末がどんなもんか  
350 ヒロノ わしじゃあ知っとるもんがあ、教えちゃらんといけんのんじゃろうけどのお

### 4-1-2. 自然談話における「じゃ／だ」の混在

自然談話では、表4からもわかるように、「じゃ」と「だ」の両方が使用されている。また、両形式の混在は、1つの話題のなかにおいても出現する。例5は、M1の混在が現れた会話の一部である。下線部が「じゃ」及び「だ」を使用した箇所である。135M1で「じゃが」を使用した後、152M1「だった」、153M1「だけど」、159M1で「だったら」を使用し、直後の160M1で「じゃけ」を使用している。

#### 例5：M1の趣味であるスキーと釣りの話題

- 135 M1 ただねほいじゃがね、っ若い時にしかできんけえ

- 136 F うわーやりたいやりたい  
 137 M1 機会があったらやるべきよ  
 138 F うわーじゃあ今度長教えてください  
 139 F (笑い)  
 140 M1 /(笑い)  
 141 M1 {( ) かい}  
 142 F だってもう初心者ばかりなんですもん私のまわりも  
 143 M1 {ああー}  
 144 F さすがに  
 145 M1 あの一学校があるけえね、うん  
 146 F うんうんうんうん  
 147 M1 半日コースとかね↑  
 148 M1 あーいうなの入ったらね、もう全然違うけえ  
 149 F 初心者コースもありますよ / ね、多分  
 150 M1 / そうそうそうそうそう  
 151 F はーそれでいいんかあ  
 152 M1 うん、スキーも好きだったね、うん  
 153 M1 もう今はもっぱら釣りだけね  
 154 F あー釣り好きなんですか  
 155 F (笑い)  
 156 M1 /(笑い)  
 157 M1 ( )  
 158 F /どこに行かれるんです広島だったら  
 159 M1 広島だったらねー、まあ、船があ、馬力がないけえね  
 160 M1 あの一、宮島周辺ですよ、わしゃあ廿日市じゃけえね

#### 4-2. 特徴 (2) 「じゃ」と「だ」の混在と接続の関係

例6は、M2の混在が現れた会話の一部である。自然談話では、「じゃけ」(19例、32%)、「じゃけど」(13例、22%)、これらに対応する「だから」(7例、23%)、「だけど」(8例、27%)が比較的高い値であった。例6では、大きく同じ意味である「じゃけ/だから」が、交互に使用されている(18M2「だから」、30M2「じゃけ」、45M2「だから」、54M2「じゃけ」)。

#### 例6：占い師の話術の話題

- 17 F 素人だから  
 18 M2 だからねーあのねー、  
 19 M2 こういう喋りしたらー  
 20 F ああありますね  
 21 M2 すごいよねこれ  
 22 F 何が書いてあるんですか  
 23 M2 (笑い) あれすごいあれねえ、占い師はなぜすぐ信用されるのかって  
 24 M2 この人すごいって思わせんにゃいけんわけじゃん  
 25 F うん  
 26 M2 それって

- 27 F うんうん  
 28 F なんかが当たり障りのないようなー  
 29 M2 そうそう  
 30 M2 じゃけえ、たとえば、二分の一の確率とかで  
 31 M2 ( ) がありますよって、( ) がありますよっていうんよ  
 32 M2 もしくはおらんってなったら、「ですよね」って  
 33 M2 「そうだと思った」みたいなね  
 34 F どっちにしてもあたりますよね  
 35 M2 うん、そう  
 36 M2 なんかがそういうようなんをお、ちゃんと  
 37 M2 広い窓口から入ってって、  
 38 M2 あなたってこういう人ですよねってことを言うと、  
 39 F うん  
 40 M2 あそうなんです ( ) なんですかーみたいな  
 41 F すごいほんとに、流れができてますよね  
 42 M2 うん、まあそういうのってえ、  
 43 M2 (笑い)  
 44 F (笑い)  
 45 M2 だからーその、何かを一買ってもらおうと思ったら  
 46 M2 信用してもらおうわけ  
 47 M2 たとえばなんかオレがこう、うーん、Fさんこれいいよ使ったらいいよ  
 48 M2 それ使ってみようかなって思われるのって  
 49 F うん  
 50 M2 信用が大事じゃん  
 51 F そうですね  
 52 M2 つかってみようかなって  
 53 M2 それまでに信用されるのって  
 54 M2 じゃけえその、お客さんと、いかに短い時間で信用を築くかっていうテクニクになる

例7は、M2の「じゃけど」と「だけど」の混在を挙げたものである。下線部が「じゃ」を使用した箇所であり、囲み線が「だ」を使用した箇所である。「だけど」が現れる発話の前後には、方言（波下線部）が使用されることが多い（102M2、109M2、170M2）。一方、「じゃけど」には、方言が現れない（84M2）。「じゃ／だ」の出現に、発話前後の方言の出現が関係しているのかどうか、今後、データを収集して検討する必要性が指摘できる。

例7：占い師の話術の話題（～111M2）、M2の店の方針の話題（166M2～）

- 84 M2 そういうことをわかってー、Eさんの番組とかもーなんか怪しいなーと思うんじゃけどお、  
 85 M2 でもそれに該当せんとときもあるんよEさんとの番組では  
 (中略。この間M2とFは「じゃ」と「だ」を使用していない。)  
 101 F えーEさんの立場がー  
 102 M2 っておれはよんどんだけど  
 (中略。「じゃ」「だ」使用なし。)

- 107 M2 あなたこうでしょって  
 108 F うんうん  
 109 M2 例えば、Uさん結構神経質なほうじゃねでもそんな神経質には見えんのんだけどお、  
 110 M2 でも神経質なんじゃねでも神経質な部分でみんな持つてるじゃん  
 111 M2 ( ) たかいことは ( ) ってあるじゃん  
 (中略。「じゃろ」「じゃけ」の使用あり。)  
 166 M2 じゃけえ結構おれは、のびのびやりよるつもりなんよ  
 167 M2 じゃけえ、まあ、よそのことは言っちゃいけんけどお、なんかその一今月はこれをせんにゃいけんよねって  
 168 M2 なんか、色々すすめられるじゃん、これやってみたらどうですかって  
 169 F うんうんうん  
 170 M2 ね、だけどうちそういうのないけえ、  
 171 F ないですね  
 172 M2 あまりこう、ただ新しいシャンプーできたらこういうのできたんですよとか  
 173 M2 こういうメニューがありますよっていうお知らせはするけど  
 174 M2 これやりませんか、ごりおしはせんじゃろ↑  
 175 F ないですね

#### 4-3. 特徴 (3) 「じゃ」と「だ」と終助詞との関係

終助詞「ね」は、女性が使う場合が多いとされてきた(真下編 1989)。ただし、断定助辞「だ」が併用された形「だね」は、男女ともが使用できて中性的であるとも言われている(松岡 2001)。映画の談話では、男性が終助詞「ね」を使う例はない。逆に、映画の談話でも女性であれば「じゃね」が2回出現しており、性差による使い分けの傾向が観察される。

例8～11は、映画の談話における「じゃの」と「じゃね」が使用された発話である。例9と例10の杉田の娘以外は全員男性である。31、266、316ではいずれも男性が「じゃ」に終助詞「の」を用いているが、267、301は女性が終助詞「ね」を用いている。

##### 例8：会議の場面

- 30 源八 指の一本くらいしめつけさんといけんわい  
 31 天政会男7 わしも、源八さんには賛成じゃのう

##### 例9：雑談の場面

- 265 眼鏡の男 なるほどお、するとお、会長は最初から計算の上で  
 266 眼鏡の男 さすがじゃのう  
 267 杉田の娘 これは博打の貸し借り表のようじゃね

##### 例10：口論の場面

- 300 杉田の娘 あんたいう人は  
 301 杉田の娘 自分のことしか考えん人じゃね

### 例 11：ひとり言の場面

- 315 保 大きな音がしたけんサツが連れてけよるわい  
316 保 じゃが、弾っちゅうもんは、当たるもんじゃのう

一方、自然談話では、男性であっても終助詞「ね」は「じゃ」接続とともに「じゃね」として現れ、「じゃね」は7例、同定義とされる「だね」も2例見られた。映画の談話では女性語ともとれた終助詞「ね」は、自然談話では男性であっても使用されていることが判る。

また、自然談話では終助詞「ね」の一般的な意味である、相手への同意や確認ではない「じゃね」も見られた（例12の48M1）。終助詞「ね」の他の意味として、松岡（2001）は親密感を表すとし、大曾（2005）は友好的会話に必要と述べており、48M1「じゃね」も同様の意味であると考えられる。

### 例 12：M1 の中学校時代のクラブの話題

- 41 F そうあじゃあ中学校、のクラブは  
42 M1 中学校のクラブはね、だからあの一吉和におった時は、野球部に、席置いとったかなあ  
43 F ふうーーん  
44 M1 で七尾ー七尾中学校にかわって来たんじゃけどね、佐伯郡（ ）ね  
45 F ふんぶん  
46 M1 あそこではあー、バレー部、バレー部しよった  
47 F 球技が、/得意ですか  
48 M1 /球技はあー、球技は得意じゃねどっちかいうと  
49 F うらやましい  
50 F 私ぜんぜん駄目 / なんですよ  
51 M1 /ふー

以上より、映画の談話では男性が「じゃの」、女性が「じゃね」を使用し、自然談話では男性でも「じゃね」を使用する傾向にある。なお、発話者の年代は、どちらの談話とも30～50/60代である。

## 5. 考 察

広島方言話者の自然談話と、映画の談話における「じゃ／だ」の使用を、接続も含めて比較、分析した。表4の「じゃ」の集計結果から、接続による自然談話と映画の談話の相違が判る。どちらの談話においても「じゃ」自体を使うことには変わりがない。しかし、接続を含めて見ると、混在がある接続や、特定形式の多用が見られ、「じゃ」の使用に差が出ていた。「じゃ」だ

けの集計ではなく、後続の接続の形式も含めて分類して集計することにより、自然談話と映画の談話における違いが明確になったと考える。

次に、会話例の特徴として2点が指摘できる。まず、映画の談話では、ある特定の形式が多く使用される点である。「じゃ（後続なし）」の多用、終助詞「の」の使用が特に注目できる。「じゃ（後続なし）」が、様々な場面においても使用され、会議での主張の他、人物紹介や雑談においても「じゃ（後続なし）」による断定表現が使用されていた（例1、2、3、4）。映画による方言の誇張（杉村2003）は、「じゃ（後続なし）」、終助詞においては「じゃの」という特定形式を使用することによって表されていると考えられる。

会話例の特徴の2点目としては、混在がある程度の秩序を持っていると考えられる点である。「じゃ」の全ての形式に混在が現れるわけではない点（例5、6）、同じ形式であっても前後の方言の出現と関連があると予測される点（例7）など、「じゃ／だ」の出現にはある程度の規則性があると考えられる。

## 6. ま と め

本研究では、実際の日常会話と映画における広島方言の使用とイメージは異なると仮定し、自然談話と映画の談話における「じゃ／だ」の使用の実態について、接続を含めて集計し、会話例を検討した。対象としたデータが、30代男性、50代男性の2人、更に会話相手が20代女性と偏っており、今後はデータを均質化する必要がある。しかし、自然談話と作られた映画での会話では「じゃ／だ」の出現のありかたが異なり、「じゃ／だ」の出現は、ある程度の規則性が窺えた。

また、先行研究で触れた「老人語」（金水2003）についても、別の言語的特徴は存在すると予測される。「老人語」は、本稿で扱った「きつい」「こわい」というステレオタイプに当てはまらないが、広島方言と同様の形式の特徴を持っている。映画と自然談話とに相違があったように、老人語にも、ステレオタイプ及び実際の広島方言と相違があると推測する。例えば、本研究での自然談話や映画の談話では、終助詞「よ」を併用した「じゃよ」が1例も見られなかった。これは老人語と何か関わりがある可能性も否定できない。老人語も含め、「役割語」（金水2003）と広島方言における言語的特徴の実態を明らかにすることが今後の課題である。

なお、筆者は、方言研究の対象として、1つの語だけでなく、接続を含めての使用の実態を明らかにする重要性を主張する。「じゃ」自体がイメージ

を持つのではなく、更に接続で違いがあるなど、談話分析による方言研究により、これまで明確に区別できなかった使用方法など、別の観点を探る可能性があると考ええる。

#### 談話データ記号一覧則

/	発話が重なった箇所
( )	発話が聞き取れない箇所
↑	上昇イントネーション
{ }	笑いながらの発話
、	1秒以内の間

#### 調査資料

深作欣二 (1974) 『仁義なき戦い 完結篇』東映ビデオ株式会社

#### 参考文献

- 大曾美恵子 (2005) 「終助詞「よ」「ね」「よね」再考——雑談コーパスに基づく考察——」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ編『言語教育の新展開 牧野成一教授古稀記念論集』ひつじ書房、pp.3-14
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏編 (2007) 『役割語研究の地平』くろしお出版
- 久野真 (2006) 「特集若者の「方言」 現代の「若者」が使う方言」『日本語学』25-1、明治書院、pp.6-17
- 熊谷智子 (2003) 「特集ドラマの日本語 シナリオのある会話——ドラマの日本語の特徴——」『日本語学』22-2、明治書院、pp.6-14
- 佐藤和之・米田正人編 (1999) 『どうなる日本のことば——方言と共通語のゆくえ』大修館書店
- 杉村孝夫 (2003) 「特集ドラマの日本語 ドラマの中の方言」『日本語学』22-2、明治書院、pp.78-86
- 徳川宗賢監修 (1989) 『日本方言大辞典 上巻』小学館
- 灰谷謙二 (2005) 「広島方言における関西方言受容」陣内正敬・友定賢治編『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』和泉書院、pp.101-116
- 真下三郎編 (1989) 『女性語辞典』東京堂出版
- 松岡弘監修 (2001) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

## 謝 辞

本研究で使用した自然談話データについては、筆者が日常でお世話になっている M1、M2 のお二人に会話の録音をお願い致しました。お名前は挙げませんが、広島方言の調査にご協力戴いた M1、M2 のお二人に、心から御礼申し上げます。突然のお願いにも関わらず、快く引き受けてくださり本当に有難うございました。お二人のご厚意に、深く感謝致します。